



東洋英和女学院

史料室だより No.91

2018.11.6 発行
東洋英和女学院
史料室委員会



★ 「村岡花子のアルバムに書き込まれた短歌」(1913年)

村岡花子(安中はな)は当時20歳。東洋英和女学校高等科を卒業したのち、学校に留まり宣教師に日本語を教えるなどしていました。このアルバムに書き込まれた歌には「憂き時の名残とやせん幸の日のかたみとやせん、今日の我が影」とあり、文学への熱い思いを抱えたまま、自分の人生はどこに向かっていくのか、定まらぬ未来への花子の不安や葛藤が刻まれています。

★ 目次

特集	村岡花子 没後50年記念特集(2) 村岡花子と竹柏会「心の花」	
	歌人 佐佐木 幸綱 氏……………	2
	「史料室だより」リニューアルご挨拶……………	5
〈資料紹介〉33	「雑記帖 その三」(前編) —村岡花子 高等科卒業からの十ヶ月—	
	神藤 真理……………	6
学院資料・村岡花子文庫展示コーナーご案内……………		9
〈東洋英和の先生がた〉1	塚本哲也先生 —忍耐をもって取り組めば、次第に道が開ける— ……	10
史料室から、ごきげんよう……………		11
利用統計/史料室の活動より……………		12
「史料室だより」既刊号目次(No.81~90)……………		14



村岡花子 没後50年記念特集（2）

村岡花子と竹柏会「心の花」

佐佐木 幸綱

はじめに

村岡恵理編『花子とアンへの道』所収「村岡花子略年譜」の明治42年の項に次のようにあります。

「前年に編入してきた伯爵令嬢、柳原燐子（白蓮）に導かれ、歌人の佐佐木信綱に師事。短歌結社竹柏会に入る。信綱の紹介で片山廣子と出会う」。この年、村岡花子は16歳でした。ついでに、ここに出てくる人たちの年齢をみておきましょう。柳原燐子・24歳、片山廣子・31歳、佐佐木信綱・37歳。登場人物たちはみな若いですね。

16歳の年のこの出会いは、村岡花子の生涯にとって二つの点で大きな出来事でした。一つは、短歌と出合ったこと。花子は歌人にはなりませんでしたが、短歌とは一生つきあってゆきます。エッセイ集『腹心の友たちへ』等を見ると、自作の短歌がしばしば登場するのはご存じの通りです。二つめは、片山廣



佐佐木 信綱（ささき・のぶつな）1872—1963
歌人・国文学者、短歌結社「竹柏会」を主宰



短歌創作に勤んでいたころの村岡花子
（当時 安中はな）

子との出会いです。村岡花子が小説を書いたり、翻訳の仕事をしたりするようになる大もとには、片山廣子との出会いがあると考えられるからです。

ここでは、短歌結社「竹柏会」とは何なのか、どんな人たちがいたのか、当時の佐佐木信綱はどんな立場で何をしていたのか、その辺りを見ておきたいと思います。

「竹柏会」と「心の花」

明治31年2月、佐佐木信綱が主宰する「竹柏会」が発行する月刊短歌雑誌「心の花」が創刊されます。明治30年代から40年代にかけて、短歌結社が続々と成立しはじめ、次々と短歌雑誌が発行されはじめ

ます。江戸時代以来の門人組織では時代に対応しきれなくなったからです。「心の花」より2年おくれて、与謝野鉄幹が「東京新詩社」という短歌結社をつくり、「明星」という雑誌を発行します。

結社というと何か大きな組織のようですが、仕事は三つだけ。①雑誌の発行、②歌会の開催、③新人の育成。とくに事務所とか会館をもつわけではなく、自宅がそのまま結社の本部というか所在地になるのが普通でした。

ちなみに「心の花」は現在も存続しており、創刊120周年を迎えて、最古の短歌雑誌として盛大な記念会を今年7月に行いました。ついでに言えば、俵万智は1970年代からずっと竹柏会の会員として「心の花」に短歌や文章を発表してきています。

「心の花」の歌人たち

村岡花子が入門した明治42年、創刊11年のころの「心の花」には、どんな歌人たちがいたのでしょうか。

まず佐佐木信綱。明治36年に刊行した歌集『思草』の歌人として、『日本歌学全書』『校注伊勢物語』『歌学論叢』等を世に出した国文学者として、軍歌



早くから竹柏会のなかで頭角をあらわし、花子のあこがれの存在だった片山廣子

「勇敢なる水兵」「水師營の会見」等の作詞者として、小学唱歌「夏は来ぬ」等の作詞者として、東京帝国大学講師として、若いながら多少知られるようになっていました。信綱の家庭のことを言えば、末っ子だった私の父・佐佐木治綱がこの年の2月に産まれて、信綱は7人の子持ちになっていました（子供は全部で9人できましたが、一人は養子に出し、一人は生後間もなく死去しています）。当時は神田小川町に住んでいました。が、子供が多く来客も多いので家が手狭になり、3年後の明治45年に本郷西片町（現・文京区）に引っ越すことになります。

片山廣子は、「心の花」発行以前、東洋英和女学校を卒業した2年後の明治29年に「竹柏会」に入会します。早くから頭角をあらわし、「心の花」が創刊されてからは、若手歌人として誌上で活躍します。短歌だけではなく、エッセイや翻訳なども掲載します。当時はヨーロッパ文学の紹介がさかんで、「心の花」も、短歌雑誌でありながら、森鷗外や上田敏の翻訳をしばしば掲載しています。野口米次郎、新渡戸稲造などの名も目次に見られます。総合文芸誌的な面もあったわけです。長谷川時雨や竹林無想庵の小説が載ったりもします。片山廣子が最初の歌集『翡翠』を刊行するのはやや後のこと、大正5年でした。

柳原燐子は白蓮というペンネームで、明治40年代に「心の花」誌上に短歌を発表しはじめます。「白蓮」という名は、日蓮に心のすくいを求めた燐子が、日蓮にちなんでみずからつけた筆名と言われています。

その他、花子入門当時の「心の花」では次のような人たちが活躍していました。

大先輩に、石樽千亦（40歳）、片山廣子の同世代に橘糸重（36歳）、大塚楠緒（34歳）、長谷川時雨（30歳）、白蓮と近い二十代に、川田順（27歳）、新井洸（26歳）、木下利玄（23歳）、九条武子（22歳）らがいました。

女性では、歌人としてだけではなくピアニストとしても活躍、後に藝大教授になった橘糸重、小説も書き、夏目漱石のあこがれの人として知られる大塚楠緒、西本願寺の娘として育ち、のちに仏教を基盤にした社会運動家としても知られた九条武子らがいました。

男性では、川田順、新井洸、木下利玄の20代の3人が、「心の花」三羽鳥として売り出しはじめた時期でした。新井洸、木下利玄はともに40歳になる前に惜しまれつつ他界してしまうのですが、洸の『微明』『新井洸歌集』、利玄の『紅玉』『一路』『李青集』などは、今でも少なくない読者をえています。川田順は、戦後「老いらくの恋」で有名になりましたが、住友コンツェルンの理事として財界でも知られ、また歌人として活躍しただけではなく、『西行』『西行の伝と歌』をはじめとする西行の研究、『吉野朝の悲歌』『戦国時代和歌集』等、中世和歌の研究でも多大の業績を残しました。

明治42年当時の「心の花」では、こういった先輩歌人たちが活躍していました。とくに、橘糸重、大塚楠緒、片山廣子らは花子のあこがれの先輩だったはずで、彼女らの短歌を熟読していたのだらうと考えられます。



竹柏会に共に入門し、花子を短歌の世界に導いたのは柳原白蓮だった

「稽古日」の様子と信綱の指導

片山廣子は入門当時のことをこう書いています。「学校を出てから私は佐佐木信綱先生の神田小川町のお宅まで、歌のおけいこや源氏物語のお講義を伺ふため一週一度づつ通った。(中略)私の家から神田小川町までかなり遠かった。朝九時ごろ人力車でゆき、帰りは十二時ごろ向うを出てぶらぶら歩いて帰ると、ちやうど一時間ぐらゐになつた」。当時は、稽古日あるいは面会日というのがあって、師弟が一对一で指導し指導を受ける形が一般的だったようです。大正時代に有名な歌人・坪野哲久が「アララギ」の面会日に毎週出むき、島木赤彦に対面の指導を受けたという話を直接聞いたことがあります。「アララギ」でも同じ形だったのですね。佐佐木信綱の場合、週に2日ほどそうした指導の日が設定してあったようです。大正時代の話ですが、信綱宅があった本郷西片町の自宅前の道路には人力車が列をなした、と伝えられています。

当時の面会日、稽古日には、持参した宿題の歌(前もって「題」をだされていた題詠歌)や、自由に作っていった短歌を添削してもらいました。その折、教える側は、文法や書式、古典和歌や先輩の短歌、同時代の歌人の歌の話などもしたはずです。さらには文学・芸術一般、礼儀や社会の仕組みにいたるまでの一般教養についても話をし、本や人を紹介したり、将来への指導も行ったりしたようです。

跡見学園を創始した跡見花蹊、実践女子学園を創始した下田歌子ら、幕末から明治初期の有力歌人が



村岡花子の蔵書には、「心の花」同人の歌集(署名入り)や佐佐木幸綱の編著書が残されている(村岡花子文庫より)

学校教育に進出しているのは偶然ではありません。入門制度時代から短歌の指導だけではなく、一般教養についても指導していたので、学校教育へもその路線で進んでゆけたのでした。跡見学園は明治8年と早くにスタートしたのですが、実践女子学園は「心の花」の1年後の明治32年にスタートしていますので、来年創立120周年を迎えるとのこと。明治という時代は、教育面でも、新しい方向を開きつつあったのです。

おそらく稽古日の対面指導の際に、信綱も短歌の指導だけではなく、一般教養はもとより、当時の新しい翻訳や小説の話などとしたのだろうと考えます。先輩の片山廣子の話も出て、では彼女を紹介しましょう、ということになったのだと思われます。

10代の村岡花子には、そんな稽古日の際の佐佐木信綱の話が新鮮に聞こえたのだろうと想像されます。

〈執筆者プロフィール〉

佐佐木 幸綱（ささき・ゆきつな）

1938年 東京生まれ。短歌誌・竹柏会「心の花」主宰。早稲田大学名誉教授。日本芸術院会員。「朝日新聞」「東京新聞」歌壇選者。歌集に『百年の船』ほか。評論集に『作歌の現場』ほか。現代短歌大賞、読売文学賞等を受賞。



「史料室だより」 リニューアルしました！

史料室委員会委員長 山本 香織（小学部長）

91号を手になされて、どのように感じられたでしょうか。史料室委員会で検討を重ね、この号よりリニューアルしたものをお届けしております。

最大の変更点は文字を大きく読みやすくしたことです。多くの方のご要望にお応えしました。それに伴い誌面のサイズも、長年親しんできたB5判からA4判となりました。

またレイアウトを工夫し見やすいものにしたことに加え、内容のリニューアルもあります。90号まで35回続いた〈思い出の先生がた〉のページを、今号より〈東洋英和の先生がた〉といたしました。一人の執筆者の思い出が中心のものから、史料室で集めた資料等をもとに、より広く業績をお伝えする内容へと一新です。

今後さらに親しみやすい「史料室だより」を目指して、内容を充実させていく予定です。広く史料室の活動を知っていただくための情報コーナーなどを考えています。そのほかアイデアやご要望がありましたら、史料室までお知らせください。どうぞよろしくお願いいたします。

「史料室だより」とは？

→創刊は1977（昭和52）年にさかのぼります。学院の史料室委員会が年2回（5月と11月）発行しています。史料室委員会では学院の史料の系統的な収集、整理、保管及び有効な利用を図るための活動の一つとして「史料室だより」の編集を行っています。

既刊の「史料室だより」を読むには？

→「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。

「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。是非ご覧ください。

URL : <http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/>

〈資料紹介〉 33

「雑記帖 その三」(前編)

—村岡花子 高等科卒業からの十ヶ月—

神藤 真理

黒色の縦20.2cm、横12.8cmの冊子。表紙にはおそらく花子が自身で切り抜いたであろう白い紙が貼ってあり、そこに「雑記帖 その三 花子」と記されている。雑記という言葉の通り、英文和文で日記、随想、短歌、詩、翻訳作品等、ほぼ日付順に書き込まれている。また、雑記帖の花子の短歌の記載の特徴としては、日記や随想と共に詠まれることが多い。

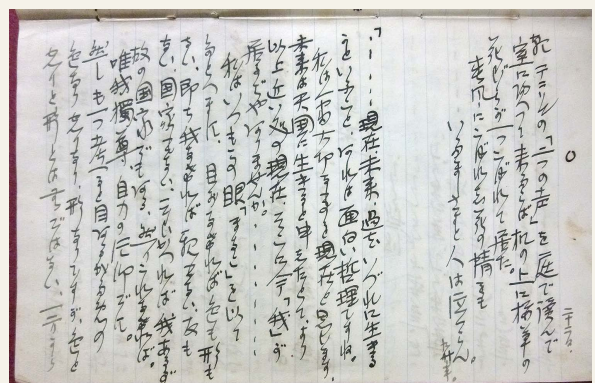
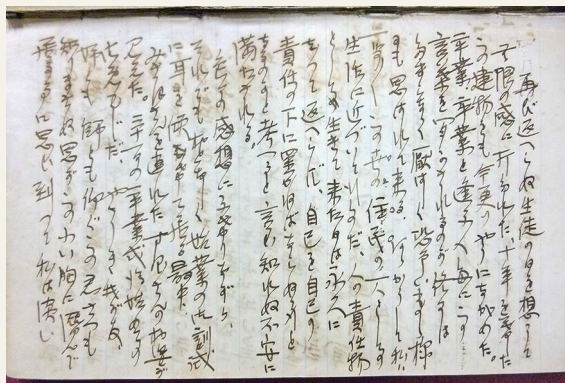
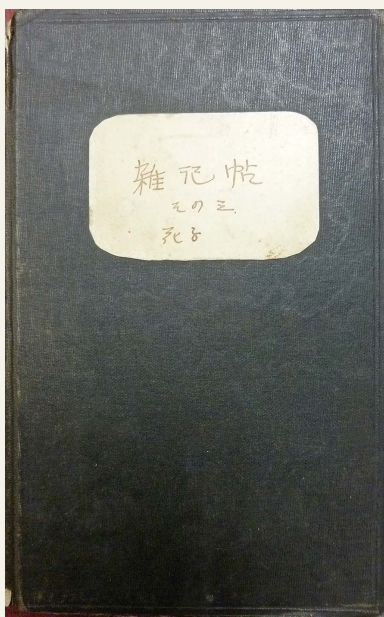
「その三」とあるので、「その一」「その二」もあるのではないかと推察されたが、現在では所在が不明だそうである。

「その三」に記された最初の日付は1913(大正2)年4月11日で、最終の日付は1914(大正3)年2月7日である。花子は1913年3月に東洋英和女学

校高等科を卒業し、1914年4月に山梨英和女学校に赴任している。花子は給費生であったため、卒業後は母校や姉妹校で奉仕する義務があったと思われる。従ってこの雑記帖はその時期の記録となり、当時の花子の足跡を辿るうえで貴重なものと言えるだろう。100ページを超えるこの雑記帖の概要を、いくつかの項目に分けて紹介していきたいと思う。

花子の生活

4月11日、「再び返へらぬ生徒の日を想うて無限の感に打たれた」「人の責任物として生きて来た日は永久に去つて返へらず、自己を自己の責任の下に置かねばならぬ身となるのかと考へると言い知れぬ不安に満たされる」と、庇護される生徒の立場を離れた時の恐れにも似た思いが吐露されている。



「雑記帖 その三」若き日の花子の思いが率直に綴られている



花子のアルバムより。東洋英和女学校卒業時の写真（前列右が花子）。この写真が写された頃から「雑記帖その三」の記述が始まっている

6月4日、「Miss Birdの室で読本の五の巻を教へる」と学校で宣教師の先生に天照大神の岩戸神話について講義したことが書かれていた。Miss Birdと女性の好奇心について話して笑ったなど、学校での花子の様子が想像される。この頃花子は「カーメン」（メリメの小説『カルメン』の女主人公のこのようだ）は自由だと称え、「新しい女」について論じたりなどしている。また、当時「叔母の家」と「学校」を行き来しているような記述も見受けられる。「叔母」が如何なる人なのかは孫の村岡恵理氏にもたずねたが、詳細は不明である。

柳原白蓮の手紙

柳原白蓮についての記述は三箇所ある。白蓮からの手紙が届き、花子はその手紙を引用、そして手紙の内容に対する所感を述べている。

1908（明治41）年白蓮は東洋英和女学校に23歳で編入学し、15歳の花子と親しみ、花子を佐佐木信綱の元に導いた。「雑記帖その三」の時期の白蓮は1911年に伊藤伝右衛門に嫁ぎ、福岡にいた。手

紙を書いた当時は27歳となっていた。

4月22日「…現在、未来、過去いづれに生きるかといふこと、（略）私は一番大切なものを現在と
 思います。（略）虚にあらざ、実にあらず、この言葉がわかつて？」（白蓮の手紙。下線筆者）。花子は、「わからなくともかまはない」と書くが、26日「私は永遠の『今』に生きたいのだ」（下線筆者）と記し、「『人の世の浮ける名やなに富やなに』君がみ歌に思い入る宵」と詠んで、白蓮に思いを馳せている。また、「若しやあちらでも今時分その寂しい部屋の中でひとり静かに私の思の跡を繰り返してはなどゝ考へる」と、手箱からこれまでに届いた白蓮からの手紙を引き出して読む。花子が大病になった夢を見たが、その時ほんとうに花子が病気であったと知り、恋しい人の有様は幾里の外までも通じるとの白蓮の手紙。また、別の手紙には、花子のことを「可愛い、憎い」とも書いていて、花子はこの矛盾を「世の中には有る事かも知れない、これは私にはわからない」と受けとめる。

5月27日、白蓮は手紙で現在の自分の寂しさを

訴える。花子は「君が外に命さゝげん人ひとり 在りとし聞かば何とのたまふ」と詠み、燐さま（白蓮）は私の心を奪った人を恨むかもしれないと思う、そして「燐さま、ごめんなさいね」とそのように考えたことを詫び、「ゆくりなく写りし影をなつかしみ鏡いだきぬ逝く春の宵」（下線筆者）と白蓮の歌を大好きだと記す。「鏡を見ると（中略）其処に自分と、それからもう一人見た事のないなつかしい人の上を思ふ」と花子は述べている。9月6日に「おもひで」という随想の中で「鏡を抱いて、泣いた」、9月8日頃には「鏡をいだいて、涙の限り泣きたい」との記述がみられる。（下線筆者）

以上の内容から、二人の濃密な関係が浮かび上がるとともに、白蓮の思考や表現の、花子への影響を読み取ることができると思う。

片山廣子の葉書

10月23日「大森の片山様から御ハガキ、『星がとぶ、いづこへかとお天の川水ほの白き夜の夜空に。くちなはのかしらに秘むる青き玉とり得し君かあまりかしこき』とのお歌が。」とある。1909年に佐佐木信綱から東洋英和の先輩である片山廣子を紹介され、以来花子は15歳年長の片山を敬愛していた。雑記帖に送られた短歌を書き写すのも、その思い故であろう。

広岡浅子の修養会へ参加

白蓮の項で記した「おもひで」は、8月28日から9月6日帰京までの広岡浅子主催の修養会参加の時のことと思われる。場所の名は明記されていないが、帰途、御殿場行きの馬車に乗ったことなどから、二の岡であろうと推測できる。この修養会は花子にとって意義深いものであったようだ。10月6日に、「一ヶ月前の今日、山から都へ帰へつた。つかれて、かなしく、寂しく、然し新らしくなつて帰へつて来た。」と記している。

千本木〔道子〕さん、福岡さん、小橋〔三四子〕さん、御後室様〔広岡浅子だろう〕など、交流した人の名が書かれている。また、「ぶどう〔ぶどう〕汁を飲み」と、飲食物についてあまり書かない花子の珍しい表記もみられた。



花子の写真アルバムより、広岡浅子（前列・左から二番目）と花子（広岡浅子の右隣）。浅子の二の岡の別荘で開かれた若い女性たちのための夏の修養会は花子の人生に大きな影響を与えた

この時期、花子はしきりに「世の中は苦しい」「悲しい悲しいやるせない」「淋しい」等の言葉を書きつけている。さらに、「相聞^{そうもんきりよ}羈旅より」として、「恋人とわかれてひとり行く旅のふるさとながらとつ国と見る」他、五首の失恋の短歌を書いている。この五首が花子の作かどうかは不明である。

玉川

5月10日、「玉川にて」という散文の中に「玉川辺小櫛手にしてたゝずめばみだれ毛軽う秋の風吹く」と、花子が明治42（1909）年に綴った『短歌ノート』所収の短歌が再録され、「其日から歌は私の生命の一部となつた」と短歌への思いが述べられている。明治42年の10月の昔に、花子は久しぶりで歌を詠み、「長い間この胸に眠つて居た調がよみ返つた場処」として玉川を「なつかしい処」としていると書きとめている。

この当時の花子の芸術観、人生観は、雑記帖の冒頭の英文と二首の短歌に示されているように感じた。それらを含め、次号の資料紹介でも引き続き、花子の芸術観、翻訳作品などについてご紹介できたらと考えている。



（かんどう まり 中高部国語科教諭・史料室委員）

村岡花子文庫展示コーナーご案内

「村岡花子文庫展示コーナー」では東洋英和の卒業生であり翻訳家、児童文学作家であった村岡花子の書斎を再現し、村岡家から寄贈された花子の著作や蔵書、執筆原稿その他の資料を公開しています。常設展示に加え、年に数回内容を入れ替え、企画展示も行っています。

今回の企画展は、今号の「史料室だより」No.91の特集と〈資料紹介〉で取り上げた村岡花子と短歌に関する貴重な資料を展示いたします。

〈現在開催中の企画展〉

「村岡花子 没後50年企画展示 ②

村岡花子と短歌創作

—花子の名訳の源泉をたどる—

会期：2018年10月3日～2019年9月28日

村岡花子 没後50年企画展示 ②
Special Exhibition II in Commemoration of the 50th Anniversary of Muraoka Hanako's Death

村岡花子と短歌創作

—花子の名訳の源泉をたどる—

Muraoka Hanako and Tanka Work
—Searching a Source of Hanako's Excellent Translation—

東洋英和の卒業生であり、翻訳家・児童文学者として活躍した村岡花子が亡くなってから2018年で50年になります。今回の企画展示は没後50年記念の第二弾として、村岡花子と短歌創作について紹介いたします。

The year 2018 is the 50th anniversary of Muraoka Hanako's death. After graduating from Toyo Eiwa she worked for translation and children's literature. Special Exhibition II introduces Muraoka Hanako and her tanka work.

2018年10月3日(水)～2019年9月28日(土)
展示時間 日曜日・祝日・長期休暇以外
9:00～20:00
(土曜日は 9:00～19:00)



同時開催 学院資料展示コーナー企画展

「受贈資料展② 〈松岡正樹氏寄贈〉

今諏訪勢以 (いまずわ・せい) 所蔵古写真

会期：2018年10月3日～2019年6月15日

「史料室だより」No.86の〈資料紹介〉でもご紹介した、127枚におよぶ今諏訪勢以 (いまずわ・せい) コレクションの古写真を公開いたします。

寄宿生、教員として長く東洋英和で過ごした今諏訪先生のもとには東洋英和関係者から多くの写真が寄せられ、大事に保管されていました。

当時を知る、貴重な写真の数々を是非ご覧ください。



「史料室だより」No.86〈資料紹介〉より

【学院資料・村岡花子文庫展示コーナー】

入 場 料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます。

展示場所：東洋英和女学院 六本木校地 本部・大学院棟1階

公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の9：00～20：00（土曜日は～19：00）

※館内のお手洗いはご利用いただけません。／団体での見学の場合は、予めお知らせください。

〈東洋英和の先生がた〉 1 塚本哲也先生

忍耐をもって取り組めば、次第に道が開ける

国際派新聞記者から作家・大学人へ

第2代学長を務められた塚本（旧姓 木村）哲也先生は、毎日新聞社政治部で岸信介首相担当の頃、日米安保理解のため国際法の本場ウィーンへの留学を志す。現地のことを聞くために大使館から紹介されたのがピアニスト塚本ルリ子氏（第一回オーストリア政府給費留学生）。意気投合した二人は結婚、後には「双生児」夫婦と呼ばれるほどであった。

彼の地で長期的な視野で事象を見る歴史感覚を身に付け、特派員として東西冷戦の欧州を取材、先生はその後記者から作家へ転身する。『ガンと戦った昭和史』では義父・塚本憲甫氏（国立がんセンター第4代総長）を描き、第8回講談社ノンフィクション賞を受賞、留学時の着想から発展して書き上げた『エリザベート―ハプスブルク家最後の皇女』は第24回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。また東洋大学・日本大学・立教大学・防衛大学校で教鞭を取り、教育者としても歩みを進めていく。

東洋英和での塚本先生

1995年大学社会科学部教授に着任、地域文化学系の「塚本ゼミ」では「ヨーロッパの社会と文化」をテーマとした。1999年学長に選出された後も継続され、毎年多くのゼミ生が巣立っていった。その一人、野村（伊藤）桃子氏（1999年卒）は、「先生はとても穏和で物静かな方。私達を孫のようだととても可愛がって下さり、和気藹々としたゼミを休む人は誰もいませんでした。就職氷河期で不安を感じる中、論文のご指導はもちろんのこと就職面接のご指導も頂きました。多くの著名な方々とのご交流がお有りの先生のご指摘はいつもの確で、多くのゼミ生が希望する会社からご縁を頂きました。論文の内容を決める際も、自分が本当に興味のある事、将来に繋がる事を選びなさいと仰っていました。敬虔なキリスト教徒で大変な愛妻家である先生が奥様のお話をなさるご様子はとてもチャーミングで、ゼミ生



の間では、あんな男性と結婚したい！とよく言ったものです。」と語る。また、大学附属かえで幼稚園の園長も兼任、学内でいくつもの重責を担っておられた。

学長・塚本哲也先生の思い出を尋ねると「式辞が秀逸」との声があがる。卒業式で引用したエピソードの一つが、レントゲン博士の娘の言葉である。博士はノーベル賞の賞金全額を大学に寄贈したが、その娘を以前塚本先生が取材したという。―「何も残さなかった父に感謝している。自らを捨てて人のために生きることを教えてくれた」。また大学創立10周年記念式典の式辞では、貢献者への感謝の言葉と共に「時の流れはハードからソフトへと移り変わりがつつあります。(略) これからは前にもまして内容の充実、質の向上をはからねばなりません」と述べている。言葉の通り、先生は時代に合わせた改革（社会科学部→国際社会学部への名称変更、各科定員の増減、臨床心理学・死生学など大学院の充実）を実行なさった。

学長就任から数ヶ月後、最愛のルリ子夫人が脳出血で倒れ左半身不随に。塚本先生は激務の中、自宅

では家事全般から食事の世話までこなしていらしたが、任期4年目の5月、ご自身が脳出血で倒れ右半身不随となった。懸命にリハビリに励むも卒業式の出席すら叶わず、任期終了に伴い退職された。

「執念の人」

東京から群馬県榛名にある新生会「穂和の園」に移住された先生は、リハビリを兼ねてパソコンを習い、左手一本で執筆活動を再開した。2005年9月にはルリ子夫人が逝去、落胆した先生だが、聖イグナチオ教会（1988年同教会で受洗）の松本紘一主任司祭の言葉「悲しめるだけ悲しんで」に救われ、悲しみを乗り越えていった。そしてついには、夫人も生前完成を楽しみにしていた著作『マリー・ルイーゼ』、『メッテルニヒ』、さらには塚本家一家4人の歩みを綴った大著『我が家の昭和平成史』を刊行したのだった。最後まで諦めない「執念の人」であった（日本経済新聞夕刊「追想録」より）。

塚本先生の著作、寄稿、スピーチには、いつもあ

たたかさと優しさが滲み出ている。家族への愛、学生への愛、そして社会への愛に溢れた方であった。

塚本 哲也（つかもと・てつや）先生

— 略 歴 —

- 1929年 4月29日 群馬県館林市に生まれる
- 1954年 東京大学経済学部経済学科卒業、毎日新聞社入社
- 1962年 ウィーン大学留学（第四回オーストリア政府給費留学生）
- 1963年 毎日新聞社ウィーン支局長（ソ連東欧担当）
- 1965年 オーストリア共和国文化功労勲章授章
- 1968年 ボン、プラハ支局長（独、NATO、EC、東西関係担当）
- 1978年 論説委員、東洋大学を皮切りに各校で大学講師を務める
- 1992年 防衛大学校図書館長
- 1995年 東洋英和女学院大学社会学部社会学科教授
- 1999年 本学 学長（～2003年3月）
- 2000年 オーストリア共和国有功大栄誉銀章授章
- 2016年 10月22日 逝去（享年87歳）



史料室から、ごきげんよう

「敬神奉仕」90周年、それ以前にあったスクールモットー？

ミス・ハミルトン校長時代の1928（昭和3）年に「敬神奉仕」の学校標語が制定されてから今年で90周年です。東洋英和の設立は1884（明治17）年ですので、創立から標語制定まで、学校には共通のモットーのようなものはなかったのでしょうか。

学院の史料室には興味深い資料が二点残されています。一つは宣教師の校長先生たちが残したスクラップブック（「史料室だより」No.89で資料紹介しています）の最初のページの印刷物です。そこにはこのような英語が刻まれたカードが貼られていました（写真右）。

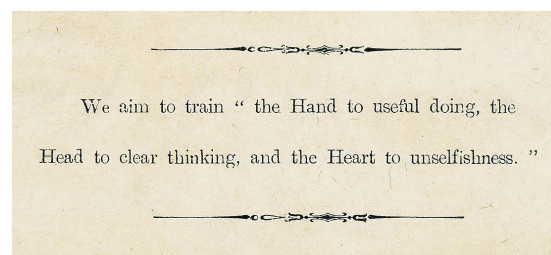
We aim to train “the Hand to useful doing, the Head to clear thinking, and the Heart to unselfishness.”

そしてもう一つの資料はミス・ブラックモア校長時代の、創立25周年記念の冊子です（コピー

のみ現存）。そこにも堂々と同じ英文が印刷され、翻訳文も一緒に掲載されていました。

「[私たちの目指すところは] 手にて有用なる技工を練り頭に明瞭なる思考力を養ひ兼て克己の精神を修養するにあり」

なかなか難しい文面ですが、当時、宣教師の先生方はこのような理想を抱いて東洋英和の教育活動を行っていたことがうかがえます。この英文について、何かご存知の方がいらっしゃいましたら、史料室までおしらせください。



利用統計 (2018年4月～2018年9月)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月
展示見学者数		169	170	247	199	69	122
展示見学者区分	学内関係者	92	74	140	34	13	25
	一般	77	96	107	165	56	97
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
資料閲覧者数(累計)		5	7	13	14	3	5
閲覧者区分	本学学生・生徒		2	1	1		
	現教職員	2		2	4	1	5
	旧教職員		1	1	1		
	同窓生・学院関係者		1	1	1	1	
	同窓生(研究者)		1	2	3		
	他校研究者・学生	1	2	4	4	1	
利用の目的	一般	2		2			
	年史編集			1			
	著述・論文作成	1	5	4	8	2	1
	伝記資料調査	1	1	4	1		
	記録類の調査・研究	1		2	3		
	学院広報関係	2	1	1	1	1	4
	その他			1	1		
資料の種類 (重複あり)	東洋英和関係	4	6	12	12	2	5
	カナダ教会関係				1		
	村岡花子関係	1	1	2	2	1	
	周辺地域史			1			
	その他						
		4月	5月	6月	7月	8月	9月
月別レファレンス件数		3	11	6	4	4	6
質問者の区分	本学学生・生徒						
	現教職員	1	5	2	2		2
	旧教職員						
	同窓生・学院関係者	1					2
	同窓生(研究者)		1		1	3	
	外部研究者・学生		1			1	
	外部研究機関			1			1
質問内容(重複あり)	一般	1	4	3	1		1
	資料所蔵調査	1	6	2	1	1	2
	写真所蔵調査		2	2			2
	事項調査	3	7	4	3	3	5
	その他						1

史料室の活動より (2018年4月～2018年9月)

(☆は複数回)

2018年4月

- ・「楓園」86号(リニューアル号)担当箇所校正
- ・展示—村岡花子文庫・学院資料展示コーナー企画展示スタート
- ・出張—大学へ、フレッシュマンセミナーにおける自校史講義のため酒井ふみよ氏(前 史料室嘱託)と史料室スタッフ
- ・来室/調査—学外研究者。保育関連資料
- ・校正—本阿弥書店『片山廣子』(古谷智子著)の口絵頁
- ・照会—キリスト教保育連盟より、富岡正男先生「愛のわざ」歌詞について

2018年5月

- ・☆来室/調査—学外研究者(卒業生)。福田なをみ関係資料
- ・照会/資料提供—山本小学部長より「修身科目」について
- ・☆来室/調査—本学大学院生。石井次郎元院長関係資料
- ・来室/調査—学外研究者。村岡花子関連資料
- ・打合せ—村岡家を交えて秋の村岡花子記念講座について
- ・データ提供—大学図書館に学術リポジトリ用の「史料室だより」データを送る
- ・☆来室/調査—紹介のあった他大学学部生。「校友会誌」・「東洋英和ニュース」を調査

- ・打合せ—『アンのゆりかご』英訳プロジェクトの検討
- ・出張—大学史資料協議会東日本部会創立30周年記念総会、講演会、シンポジウム参加

2018年6月

- ・村岡花子文庫(和書)目録出版に向けたデータ校正作業を開始
- ・照会—中高部図書室より、史料室に「卒業生関連書籍リスト」があるか?→史料室蔵書目録データで検索可能
- ・楓美会総会に史料室スタッフが参加し、資料提供を呼びかけ。同窓会総会にも出展
- ・来室/調査—学外研究者。保育ノート・恩物資料
- ・弥生美術館より「セーラー服と女学生」展(展示に協力)に紹介された「英和結び」のデータをいただきパネルにして中高部へ譲渡
- ・来室/調査—学外大学専任講師(卒業生)。『港区史』(2020年刊行予定)のうち宗教の部を執筆のため
- ・「敬神奉仕」90周年記念のパンフレット作成について、深井院長、院長室、史料室スタッフで協議
- ・来室/閲覧—大田区郷土の会ご担当者。村岡花子、麻布の歴史などについて資料閲覧
- ・☆来室/閲覧—中高部クラブ運営委員2名(高二)。クラブの歴史について調査

- ・☆来室／調査—学外研究者（卒業生）。東洋英和の小学科の学童集団疎開について調査
- ・取材—エクスナレッジ編集者。『東京文学館めぐり』に本校の展示コーナーを掲載するため。村岡花子、東洋英和と女子教育などについて質問あり
- ・来室—松ノ井寛治氏（1962年の中学部校舎、幼稚園舎設計）ご息女より、松ノ井家と宣教師ストーン一家との家族ぐるみの交流のエピソードなどお聞かせいただく
- ・第一回史料室委員会
- ・執筆—『大学時報』特集「自校史教育と大学博物館」
- ・照会—早稲田大学歴史館より、東洋英和女学院史料室の発足について
- ・来室—立教学院展示館 豊田雅幸氏。展示コーナー・史料室・収蔵庫をご見学
- ・来校—6月28日、初代校主小林光泰のお孫様、今泉周治氏とご家族。小林光泰関係資料を提供、校内ご案内、中高部見学、鳥居坂教会訪問
- ・増淵稔新理事長誓約式のため初代校長ミス・カートメルの聖書を貸し出し
- ・講座担当—生涯学習センター「WMS改組と長野彌院長」
- ・見学案内—渡辺裕 東京大学大学院人文社会系研究科教授（「史料室だより」No.86執筆）、荒川恵子 京都女子大学准教授のゼミナールの学生約10名。

2018年7月

- ・来室／調査—三木妙子氏（卒業生・早稲田大学名誉教授）。生涯学習センターWMS講座の準備のため
- ・見学案内—7月7日の三英和懇談会にてお昼時間に展示コーナーを案内
- ・見学案内—NHK文化センター〈名建築あるき〉東洋英和女学院 国際文化会館 旧岩崎小彌太庭園（六本木）見学会。18名ほどご参加
- ・照会—麻布の広報誌に村岡花子は品川で育ったと書いてあるが？→村岡花子は5歳の時に上京し、南品川に移り住んだ（『アンゆりかご』より）
- ・来室—佐藤智美副学長。村岡花子記念講座打合せ
- ・出張—軽井沢の旧ハミルトン&ハードコテージを訪問。同窓生ふくむ18名で清掃奉仕
- ・140周年記念事業『英和事典（仮）』編纂が学院運営協議会で決定、史料室OG、史料室も関わる
- ・資料提供／打合せ—「楓園」87号特集のため
- ・来室／閲覧—幼稚園教諭。元幼稚園園長の丹羽輝子先生追悼式のための写真を検索
- ・来室／調査—高等部卒業生。戦時中の英和（永和）について
- ・執筆—「敬神奉仕」90周年記念パンフレットの歴史のパート
- ・来室／閲覧—中高部教諭。卒業アルバムなど
- ・照会—深井院長より、英語の学院標語「Reverence and Service」の使用は何年ごろからか？→標語制定時のWMS（カナダ婦人ミッション）のAnnual Report（1928-1929）での使用を確認

2018年8月

- ・「史料室だより」No.91 編集、企画展示準備
- ・照会—高峰三枝子（女優・卒業生）について
- ・照会—学外研究者より、「私立梅花幼稚園保母伝習所」とする卒業式次第が存在するが、正式名称は？→「私立上田保母伝習所」が正式名称（『百年史』212頁より）
- ・打合せ—出版文化社と。史料室所蔵資料目録について
- ・来室／閲覧—楓美会役員。大学関係資料を閲覧
- ・照会—沓澤謙一郎先生（元中高部教諭）が学童疎開の映像をお持ちかどうか？→沓澤先生より、所蔵なし。当時

は物資窮乏のため映像を撮る余裕がなかったと推測

2018年9月

- ・照会—同窓会より、1964年当時、校舎隣の石橋邸について
- ・照会—中西タキノと村岡花子の交流の資料はあるか？→史料室には無し
- ・台風到来、第二回史料室委員会延期（10月2日に延期）
- ・水谷悟准教授（静岡芸術大学）指導による、本学教育実習生5名受け入れ、資料整理の実習
- ・来室／調査—本学教員。保育関係資料
- ・☆来室／調査—石澤中学部長。「楓園」87号で「楓祭50回記念」執筆のため調査
- ・照会—学外研究機関より、山路愛山の妻、山路たね子について
- ・照会—軽井沢、宣教師キャンベル夫妻殺害事件について→若干の資料所蔵あり。

【おもな移管資料】

- ・幼稚園より、フィルムネガと保育日誌と配布物ファイル多数／園則や1960年代の幼稚園校舎建設関係の資料群／写真アルバム 2008～2010年
- ・小学部より、戦前の教務日誌など数冊
- ・高等部部長室より、富岡正男先生関連資料ほか

【おもな画像データ・資料提供】

- ・大学改革推進課、第一回大学入学式時の集合画像2点、1989年の大学画像データを数点
- ・「楓園」86・87号のための画像データ、資料提供多数
- ・外務省、日加修好90年インタビュー画像（村岡恵理氏出演）に画像データを4点
- ・紫友同窓会（小石川高校同窓会）、大正6年集合写真画像データ（伊藤長七が写っているもの）1点

【おもな受贈資料】

- ・村岡家より、村岡花子宛小林一三書簡（1点）と佐佐木信綱よりのはがき（1点）、書簡（3点）
- ・「東洋英和女学校 1947」（卒業アルバム）1冊
- ・モノクロのヴォーリズ校舎ふくむ写真14点／戦中戦後の写真13点、15点／1986年楓祭での扮装写真1点
- ・一般財団法人新渡戸基金発行『太平洋の橋』（季刊／2018年3月15日付）
- ・中高部夏服（脇にファスナー付き、スカートも）、小学部で使用した聖書、教科書、80周年記念のペナントなど
- ・記念音楽会プログラム（コピー）など
- ・野尻山荘での集合写真（1点）と80周年の記録
- ・1957年小学部運動会で使用した手ぬぐい（1点）
- ・宗教教育委員会より、受洗者への「敬神奉仕」の革のしおり
- ・ガーネットハウス横浜より、保育部会の会則資料
- ・川上律子・杉村みどり編著『メレイライラン一代記を読む』
- ・伊勢田奈緒『女性宗教改革者アルギュラ・フォン・グルムバッハの異議申立て』『ヨハネス・ブーゲンハーゲンもうひとりの宗教改革者』
- ・山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築』
- ・鳥飼玖美子『子どもの英語にどう向き合うか』、鳥飼玖美子訳、絵本『月とアポロとマーガレット』
- ・研究代表者 溝上智恵子、報告書『強制収容所の教育 移民国家カナダにおける国民意識形成と民族意識の相克』

「史料室だより」既刊号目次 No. 81～90

No.81 (2013.11.5) 特集：大学付属かえで幼稚園創立40周年 「保育レポート」から見るかえで幼稚園の40年

大漣 知子
 宣教師達のお墓を探して(2) 有賀 誠一
 〈資料紹介〉23 かえで幼稚園「保育だより」 永瀬 真澄
 〈思い出の先生がた〉26 秋月徹先生
 小学部長 秋月徹先生 倉本 和
 史料室の活動より(2013年4月～9月)
 「史料室だより」目次 No.71～80

No.82 (2014.5.22) 特集：東洋英和幼稚園100周年(1)

「宣教師の方々によって種蒔かれた神の栄光を顕す保育と
 子どもの真の幸福追求の保育」—東洋英和女学院短期大学
 保育科で学んだこと— 長山 篤子
 ハミルトン先生を回想して 芝 恭子
 〈思い出の先生がた〉27 ミス・マシューソン
 ミス・マシューソンの思い出 依田 和子
 〈資料紹介〉24 東洋英和の絵葉書 日野原千紘
 史料室の活動より(2013年10月～2014年3月)

No.83 (2014.11.5) 特集：東洋英和幼稚園100周年(2)

「カナダ・メソジスト教会の保育者養成と東洋英和幼稚園
 の開園」—女性宣教師の伝道と幼児教育— 中村 早苗
 〈資料紹介〉25 東洋英和幼稚園保育日誌 東洋英和幼稚
 園の旧園舎時代(1932年から1962年)の保育 —保育日
 誌から振り返る— 大伴 栄子
 〈思い出の先生がた〉28 ミス・スクルトン
 保育科と梅花幼稚園のスクルトン先生 山田 房子
 史料室の活動より(2014年4月～9月)

No.84 (2015.5.21) 特集：〈桜プロジェクト〉

始まりから植樹までの記録 松本 幸恵
 〈資料紹介〉26 〈桜プロジェクト〉
 カナダ旅行にて入手した史料 酒井ふみよ
 〈思い出の先生がた〉29 村岡花子先生
 村岡花子先生の思い出 村上 祐子
 史料室の活動より(2014年10月～2015年3月)

No.85 (2015.11.4) 特集：「花子とアン」始まりと経過、 そしてこれから なぜアンだったのか、花子だったのか

村岡 恵理
 「花子とアン」フィーバーと向き合って
 —史料室からの報告— 酒井ふみよ
 「学院資料・村岡花子文庫展示コーナー」の紹介
 谷川 祐子
 〈資料紹介〉27 「村岡花子文庫蔵書」
 ～目録作成の過程も含めて～ 水谷 悟

〈思い出の先生がた〉30 鶴沼さき先生

鶴沼さき先生の思い出 黒川 信也
 史料室の活動より(2015年4月～9月)

No.86 (2016.5.13) 特集：校歌

校歌の原曲版再刊行について 河野 和雄
 校歌に刻み込まれた歴史と伝統 渡辺 裕
 〈思い出の先生がた〉31 黒田成子先生
 黒田成子先生との出会い、そして学んだもの 片山 知子
 〈資料紹介〉28 松岡正樹氏寄贈 今諏訪勢以所蔵古写真
 酒井ふみよ
 史料室の活動より(2015年10月～2016年3月)

No.87 (2016.11.4) 特集：軽井沢の宣教師別荘

① 国の登録有形文化財となった「旧ハミルトン・
 アンド・ハード軽井沢コテージ」 松本 郁子
 ② ブルックサイド・コテージの歴史 酒井ふみよ
 〈資料紹介〉29 ミス・カートメルの聖書が修復されるまで
 松本 郁子
 〈思い出の先生がた〉32 衛藤藩吉先生
 好漢 衛藤藩吉先生 寺澤 東彦
 史料室の活動より(2016年4月～9月)

No.88 (2017.5.17)

「村岡花子記念講座」事始 池田 明史
 〈資料紹介〉30 『東洋英和女学院資料集 第4号・第5号
 M.J.カートメル関係史料』 酒井ふみよ
 〈思い出の先生がた〉33 加藤信子先生
 英和とともに 茂木 恵
 史料室の活動より(2016年10月～2017年3月)

No.89 (2017.11.2) 特集：カナダ合同教会アーカイブズ資料より 緊迫する国際情勢下のコーテス書簡(1925-1941年) を読む

パトリシア・スイッペル
 〈資料紹介〉31 『初期スクラップブック』 鈴木 陽子
 〈思い出の先生がた〉34 藤原(倉田)美沙先生
 生徒たちの憧れの先生 鈴木 齊
 史料室の活動より(2017年4月～9月)

No.90 (2018.5.10) 村岡花子 没後50年記念特集(1)

村岡花子の社会活動—東京婦人会館をめぐる— 松本 郁子
 〈資料紹介〉32 村岡花子文庫—蔵書のなかの宝のもの—
 梶田 マリ
 〈思い出の先生がた〉35 丹羽淑子先生
 より高い目標に向かってチャレンジされたお姿
 吉岡 元子
 史料室の活動より(2017年10月～2018年3月)